



エチオピアにおけるFC/FGM
(女性性器切除)とジェンダーをめぐる諸問題 (2007
年度第2回コロキウム)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮脇, 幸生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004901

2007年度 第2回コロキウム

エチオピアにおけるFC/FGM（女性性器切除）と ジェンダーをめぐる諸問題

宮脇 幸生

本日はエチオピアにおける女子割礼（FC）／女性性器切除（FGM）とジェンダーをめぐる諸問題についてお話しさせていただきたいと思います。

私はエチオピアで20年ぐらいフィールドワークをやってきました、そのなかで、この問題に出会うことになりました。私はもともと、ジェンダーの問題に決して関心があったわけではありません。私がエチオピアに行ったのは、周辺部に住んでいる牧畜民に関心があったからです。先輩たちから、エチオピアの牧畜民は非常にワイルドで、常に隣接民族とウシの奪い合いをしている、男性的で誇り高い人々だということを、聞いていました。私も若いころは、そういう価値観に憧れていました。研究者というのは、ジェンダーのバイアスがかかった部分で調査の対象となる人々と同一化することもあるのではないかと思うのですけれども、私も、しっかりそういう方向で同一化してしまったわけです。

けれどもずっと研究をしているなかで、いろいろと疑問に思うことが出てきました。一つは、ワイルドで誇り高い民族というふうに自分でイメージしていた人々が、詳しく調べてみると決してそうではなく、エチオピアという国家の枠組みのなかで、帝国を作った高地民族にずっと支配されてきたという歴史的な事実を知ったことです。

二つ目の発見は、彼らは自分たちの伝統というのを、一見すると非常に誇り高く語るわけなんです、そうした伝統を語っているのが、実はもっぱら男性たちだということに気がついたことです。彼らの語る伝統には、女性からの視点というのが、まったく欠けていたのです。

三つ目のきっかけは、身近な人の事故死でした。私は調査をしているときは、現地の人たちについていたり、いろいろな人たちにお話をうかが

います。その中に20歳過ぎくらいの女性がおり、一緒に牧畜なんかに連れていってもらっていました。彼女は私の友人の妹で、私もとても親しくしていたのですが、結婚するときに割礼を受け、それがもとで亡くなったのです。私にはそれがたいへんなショックでした。そういうことで、この割礼問題ということに徐々に目が向くようになったわけです。

それから私は、ジェンダーの勉強をしたり、女子割礼にまつわるさまざまな議論について勉強しました。難しい問題なので、はっきりとした結論というのは、私の力では出せないのですが、今日はまずこの女子割礼、あるいは女性性器切除についてのこれまでの議論を紹介したいと思います。

その次に、私がフィールドワークをしているエチオピア南部諸民族州のホール (Hor) という民族で行われている女子割礼／女性性器切除と、これから調査をしようとしています、首都のアディスアベバに近いところにあるオロミア州アカキ郡の女性割礼／女性性器切除廃絶運動について簡単にお話ししたいと思います。

1 FC/FGMをめぐる議論

1. 1 FC/FGMとは何か？

まず女性性器切除／女子割礼というもののなのですが、これをどんなふうと呼ぶかによって、この慣習に対する政治的なスタンスがはっきりしてきます。

FGMはFemale Genital Mutilationの略でして、Genital Mutilationというのは、性器切除です。Mutilationというのは、切除というよりも切断というほうが、むしろ正確な日本語訳ではないかと思えます。それを切断してしまうと回復不可能になるというような意味を持っています。つまり、完全な健康的な身体を決定的に損なうという意味合いがFGMという言葉には含まれているのです。FGMは、この慣習が女性の人権に対する侵害であり、これを廃絶すべきであると考える人々によって用いられます。

それに対してCircumcisionというのは、ペニスの包皮を切り取る男性の

割礼のことを意味しています。Female Circumcisionと言った場合には、この慣習が男性の割礼と比喩的に同じものだととらえる視点があり、この慣習は伝統的な儀礼だとみなすこととなります。この慣習は文化の一部であり、存続させるべきだと考える人たちは、FCと呼ぶわけです。

現在人類学者の間では、こうした政治的な含意のある語を用いることを避け、FGC (Female Genital Cutting) という言葉を用いる場合が多いようです。私も以下では、この慣習のことをFGCと呼ぶことにします。

では、実際にFGCには、どういったようなものがあるのかということですが、実は、非常に多様なタイプがあります。通常はこの多様なタイプを、三つに大別します。

一番加工の度合いの高いものに、「ファラオ型」と呼ばれるタイプがあります。ファラオ型は陰核を切除し、それから小陰唇、大陰唇を切除したうえで陰部を封鎖します。封鎖の仕方はいろいろあるわけですが、医師のいないところでは、例えば、木の刺などで封鎖をするところもありますし、あるいは、医療設備があるところでは、糸で縫合することもあります。

ファラオ型のFGCは10歳以下で行うことが多いのですが、結婚をして、男性と性行為を持つときには、非常に大きな困難が伴いますので、そのときに切開をする場合もあります。出産のときは当然、切開を行います。しかし、こういったようなことを行うところでは、多くの場合、出産のあとにもう一度縫合を行います。つまり切開と縫合を繰り返します。

2番目に「スナナ型」と呼ばれるものがあります。これは非常に軽いタイプのFGCです。陰核の包皮部分のみを切除して、陰部封鎖はしません。ただしスナナ型を行っているところは、アフリカのなかでは非常に少ないです。

それ以外の残りが、3番目の「中間型」というタイプに入られます。陰核と陰唇の一部を切除し、陰部封鎖はしない、といったようなものです。私が調査をしているホールでも、この中間型の割礼が行われています。

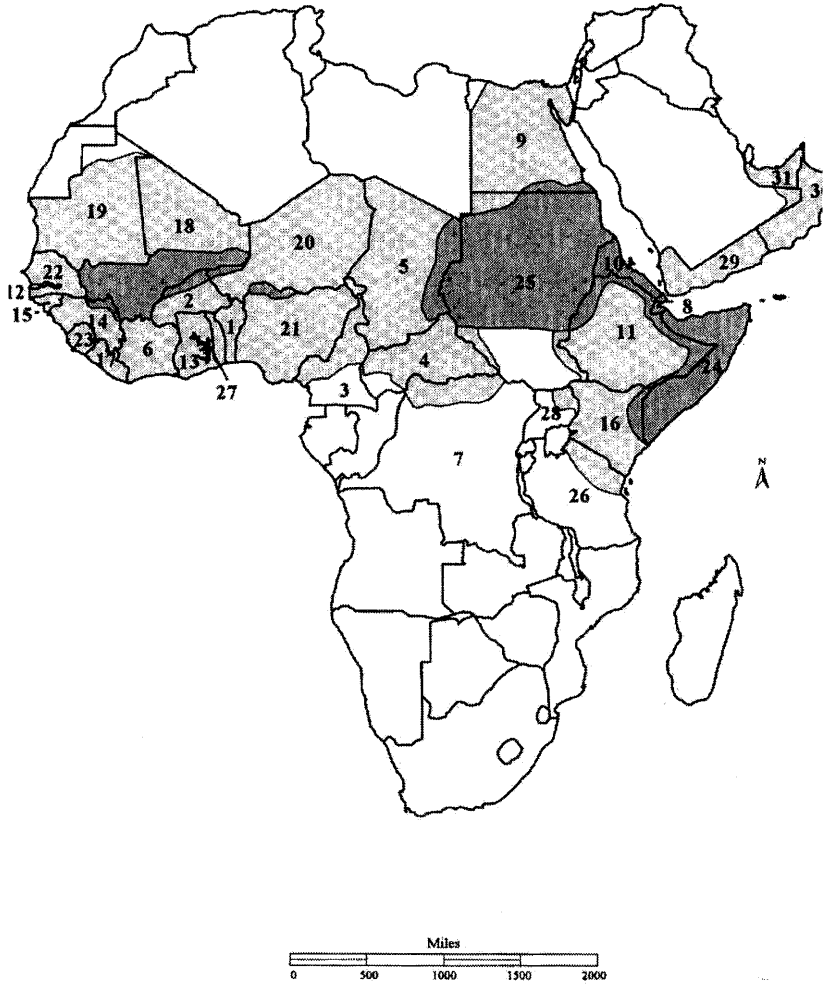


図1 FGC分布図 (Gruenbaum, E. 2001より)

図1は、FGCが行われているアフリカおよび西南アジアの一部を示しています。黒で描かれているところが陰部封鎖を行うところです。陰部封鎖を行うところは、北東アフリカに非常に多く、ソマリア、エリトリア、ジブチ、スーダンの北、エチオピアの一部で行われています。西アフリカではマリのあたりでも、陰部封鎖が行われるところがあります。陰の薄いところは、おおかたが切除型、つまりクリトリスと小陰唇、大陰唇を切除するFGCが行われています。

陰部封鎖が行われるのは、割礼を行う地域全体の人口の中で10パーセントから15パーセントぐらいと考えられています。

どのようにしてこうした慣習が広まったのかということには諸説があります。文字資料がアフリカにはほとんど残っていませんから、FGCのタイプ別の分布を見て推測するしかないのですけれども、例えば、エスター・ヒックス (Ester Hicks) という人は、エチオピアの東南部あたりの牧畜社会に起こったという説を唱えています。

その説によると、陰部封鎖がFGCの原型だということです。陰部封鎖が集中して見られるのは、ソマリアのような牧畜民の地域です。なぜソマリアで陰部封鎖が行われるかということ、ここは非常に乾燥しておりまして、ラクダ牧畜民が多い。こういった牧畜社会というのは、男性がラクダの牧畜に出かけて何週間も何カ月も家を留守にするということがあります。他方でこうした社会では、ラクダなどの家畜が非常に重要な財であるので、それを相続するための系譜が発達しています。こうした社会では、系譜を維持することが重要になりますので、一方で男性が離れているあいだに、女性がほかの男性の子どもを生まないように、こうした陰部封鎖が行われたのではないかと推測するのです。陰部封鎖は、貞操帯のようなものだと考えるんですね。

そしてイスラムの交易路が西に伸びるに従い、この慣習もイスラムの高文化の一部と取り違えられ、だんだん西に広まっていったのではないかと推測するのです。

けれどもこのような推論がどれほど妥当であるかは、難しいところです。例えば、スーダンの北部のほうは、牧畜社会ではありませんが、陰部封鎖

の慣習は広範に行われています。

1. 2 FGCはどのようにとらえられてきたのか？

先にお話しましたように、FGCをめぐるのは、擁護・廃絶・その他さまざまな立場があります。まず廃絶派についてですが、1970年代の後半から、フラン・ホスケン (Fran P. Hosken) というアメリカの女性のジャーナリストが、アフリカのさまざまな地域のFGCを文献によって調べ、反FGC (FGM廃絶運動) のキャンペーンを始めました。

このキャンペーンでは、FGCによる女性の健康被害が問題とされました。FGCが行われる地域では、伝統的な産婆や、私がいるところでは産婆でもなく、普通の老女が、カミソリやメスのようなナイフで、麻酔もせずに外性器を切除するケースが多いのです。それがさまざまな健康被害をもたらすと言われていました。

特に陰部封鎖をする場合は、成長してからも、尿や経血をスムーズに排出できなくなるようなこともあっていわれています。非衛生的な環境で、同じナイフで何人もの切除を行うために、エイズ感染の恐れも懸念されています。

けれども健康被害よりも強調されたのは、FGCは男性による女性の支配の手段であるという点でした。FGCではほとんどの場合、クリトリスを切除しますので、これは女性のセクシュアリティのコントロールであるというわけです。こうした施術を受けた女性は、自分の主体的な意思というのを喪失するのだと、こうした立場の人々は主張したわけです。これはもう決して文化・伝統ではなく、暴力であり、人権侵害であり、奴隷制に等しいというふうに主張します。

しかし一方で、こういった慣習が文化人類学者によってどのように記述されてきたのかと言いますと、FGCはしばしば、通過儀礼として記述されてきました。あるいは、女性のジェンダー・アイデンティティを構成する重要な要素であるというふうな見方がなされてきました。

その根拠の一として、FGCへの男性の直接的な関与は非常に少ないということが言われます。ですから、FGMは文化、あるいは伝統とみなすべ

きというような立場が生まれてきます。特に1980年代は、こうした「文化相対主義」と、女性の人権侵害に反対する「価値普遍主義」のあいだで、しばしば議論が行われてきました。

例えば、スーダンのエル・ダリール (El Dareer) という女性のお医者さんによる、先駆的な量的調査があります。エル・ダリールは、FGCに対して反対の立場をとっているかたです。彼女は北スーダンで3千人以上の人々に対して、アンケート調査を行ったのです。この調査結果を見ると、スーダンではほとんどの女性が、ファラオ型の陰部封鎖型のFGCを受けているということがわかります。

それならばFGCの存続に対して、人々はこういったような意見を持っているのかということですが、男性と女性の意見を見てみると、女性のほうが、むしろこうしたFGCを存続させるのに対して肯定的であるという結果が出ています。

つまり調査結果を見ると、女性で最も多いのは、中間型を支持する人たちでした。それに対して男性は、より軽いスナ型を支持する人たちが大部分を占めています。陰部封鎖型を伴うファラオ型についても、女性のほうが男性よりも支持者が多くなっています。FGCを一方的な男性から女性に対する暴力と考えるならば、この調査の結果は、それを見事に裏切るようなかたちになっていることが言えるわけです。

それならば、なぜFGCが女性によって支持されるのか。文化相対主義的な立場の分析は、このような問いを解こうとします。

その一つの例として、カナダの女性人類学者であるジャニス・ボディ (Janice Boddy) の分析を取り上げてみましょう。ボディは、北スーダンにあるホフリアットという村に2年以上住み込んで、女性の精霊憑依の調査を行っていました。この村で行われているFGCの様子についても、かなり詳しく描写をしています。それによると、子どもに対してFGCが行われるわけですが、FGCに参加しているのはすべて女性ですし、FGCを行う割礼師も女性です。

ボディは自分でも、女兒にFGCが行われる機会に立ち会っているのですが、そこでFGCが行われたあと、まわりの女性たちがそれを祝福して叫び

声をあげるという場面があります。なぜそういったような祝福が行われるのかということ、象徴分析から説明しようとしています。

なぜFGCを行うのか。それに対する回答を、人類学者は非常にしつこく求めます。多くの場合、いやそれは慣習でずっとやってきたからとか、この慣習は女性を滑らかで清潔にするからとか、そういったような回答が最初は与えられます。

ただ、そうした回答だけで満足していると、人類学者は本国に帰ってからも、よいエスノグラフィを書けないので、頑張っってその背後のさまざまな象徴というのを探し出そうとするわけです。一つの一つのピースから大きなパズルを解こうとするのです。

例えばボディは、この慣習が女性を滑らかで清潔にするという、その滑らかであるとか、清潔というような言葉が、実は重要だと考えます。滑らかで清潔なものというのは、ほかにいったい何があるかということ、ホフリアットでは、ダチョウの卵であるとか、ヒョウタンが、そうしたものの一つとしてあげられます。ボディが泊まっていた部屋にも、ダチョウの卵やヒョウタンが、部屋にかけられているわけですが、それは単なる装飾ではなくて、それがあると女性が妊娠するとされる、多産のための呪物なのです。

他にも女性が多産になるようにするためのさまざまなものがあり、それには卵、チーズ、牛乳、砂糖、米といったような食物があります。これは清潔で血液を増やすというふうと考えられているとボディは言います。缶詰であるとか、オレンジ、バナナなどの果物も清潔な食物であって、女性を多産にするというふう考えられています。

それに共通するものは、いったい何なのか。そこで推理小説みたいな話になってくるわけですが、それには、このホフリアットで人々がいただいている民俗生殖論のようなものが関連しているとボディは言います。

ホフリアットの人々は、子どもの骨は男性によって、血と肉は女性によってつくられると考えています。それと同じように、彼らの日々の生活を支えているキスラというパンケーキがあるのですが、それは男女の協力によって作られます。どういう意味かということ、男性が村の外の畑でモロコ

シを栽培する。それを女性が村の中の家で粉にして焼くというふうなかたちで、分業が行われるわけです。

このキスラというのは、それを粉にして、まず壺に入れて、水溶液をしばらく発酵させてから焼かれます。その水溶液を入れる壺と、さっき言った女性の出産というのが密接に関係しているとボディは言います。

例えば、流産した胎児というのは布に包んで、キスラの水溶液を入れる壺に入れ、家の中庭に埋葬します。死産した子どもの場合は、遺骸を布に包んで、中庭と外を隔てる家の外側に埋葬します。ところが、生後しばらく生きていた場合は、大人と同じ村外の墓地に埋葬されるのです。

つまりそこで何がなされているかという、ボディによれば、モロコシの水溶液と胎児は、象徴的に等しいものとされているのです。さらに、そうしたものを包んでいる壺と中庭、そして女性の子宮が象徴的に同一視されている。中庭というのは「囲われた」空間であって、女性の子宮も同じ「囲われた」空間であるとボディは言うわけです。

では、ほかのダチョウの卵であるとか、ヒョウタンであるとか、缶詰であるとか、バナナであるとか、そういったようなものはいったい何なのかという、それも実は囲まれているものであって、表面が閉じていて内側に何かあるものであるというふうを考えるわけです。

そしてこれらの象徴の根底にあるものは何かというと、女性の子宮だとボディは言うわけです。またダチョウの卵やヒョウタンは、表面が白っぽいので、牛乳、チーズ、砂糖、米のような白い食物も、それと同一されるのだと言うわけです。

結婚前の女性というのは、こうしたパターンに従って、卵のような、滑らかで白く清潔なことが望まれる。それは美容というよりも、まさにこうした象徴的な同一視というのが、その根底にあるのだというふうにボディは言います。

外部に通じる穴を小さくして、悪霊の攻撃を防ぐというのが、そうした女性の持っている豊かさを守るために、重要なこととなります。だから女性は、村落の内部や家の内部にすることが、重要視されるのだと言います。

女性がファラオ型のFGCを望むのも、こうした象徴的なパターンに自ら

をなぞらえて、自分のなかに豊かさをはぐくむためであると。だから、こうしたFGCを娘にすることを、母親たちはとても祝福するのだとボディは言っています。

こういう説明は、何か謎解きみたいで、最初に読んだとき、私は非常に面白かったのですけれども、本当に地元の人はこちらまで考えているのかなというふうに考えてみると、やっぱり何か違うのではないかなと思うのですね。そしてボディの本をよく読んでみると、地元の人がすべてこんなふうに説明するわけではなくて、さまざまな説明のなかから、自分がこういうパターンをつくりあげて提示しているのだというようなことも言っています。ですから私は、人類学的な象徴の解釈というもの、さまざまな問題点を含んでいるのではないかなというような気がするわけです。

さらに先ほど言った価値普遍主義的なアプローチと、こうした文化相対主義的なアプローチは、非常に折り合いが悪いということが言えると思います。つまりこのような文化相対論は、FGCというのは女性のアイデンティティを形成する、それは女性が望んで行うものであるというふうなことを言います。しかし、仮にそうであったとしても、例えば人権論者は、それは単なる迷信にすぎないし、あるいは虚偽意識にすぎないというふうに言うかもしれません。

ところが文化相対論者は、そういう迷信、虚偽意識といったような見方こそ非常にバイアスを含んだものであって、現地の女性の主体性をないがしろにしているというふうに言う。そういったような議論が、80年代にはしばしば行われました。

そのほかにも、FGCに関しては、さまざまな議論があります。例えば、健康に対する侵害であるという批判は、現在もFGC廃絶のキャンペーンでは、しばしば行われます。FGCを受けた女性はさまざまな、例えば多量の出血、激しい痛み、不妊、閉尿など、いろいろな合併症があると言われます。

しかし一方では、例えばハーバードの研究者であるオーバーメイヤー (Obermayer) という人は、1999年に発表した論文で、それまでに出されている出生率低下や合併症、あるいは性感覚の低下に関する研究は、方

法論的に問題があるものが多く、それらが有意にFGMと関連するということはできないという論文を出しています。

他にも例えば、アフリカ系アメリカ人の研究者で、自分の故郷に帰ってFGCを受けた女性もいるわけですが、彼女ははっきりと、自分は性感覚の低下はないと述べています。

さらに健康被害に対して、実際にはどのような対処がなされているかという点、FGCを医療化しようという動きが広く行われています。例えばエジプトでは、FGCをどんどんお医者さんであるとか、あるいは近代的な医療設備があるところで、産婆さんが行ったりする。ではそれでいいのかという議論もあります。廃絶論者はここで、健康被害よりもむしろ、女性の人権侵害という問題に、焦点をシフトさせます。

FGM廃絶キャンペーンに対する批判として、他にも、廃絶運動には西洋的なセクシュアリティ観がその根底にあるという批判もあります。例えばアフマドゥ (Afmadu) という人は、—この方は先ほど述べた、アフリカで自分もFGCを受けた人ですが—、陰核切除でセクシュアリティがコントロールされるというのは西洋女性の思い込みで、実際にはそのようなことはないと述べています。

ほかにもいろいろな批判があります。非常に説得的な批判の一つに、FGM廃絶キャンペーンは、より重要な問題を隠蔽する機能があるというものがあります。これはかなり早い段階から、AAWORDのようなアフリカのフェミニストによって出されていました。FGM廃絶キャンペーンをする人々は、アフリカは家父長制社会であり、非常に後進的な社会であり、というような言説を積み上げていきます。しかしそれによって、アフリカにある貧困や教育問題から目をそらすような効果を生んでいると批判するのです。

アフリカの貧困は、欧米による奴隷交易から始まり、植民地支配、近年だったら1980年代以降の構造調整によって、悪化してきました。しかしFGM廃絶運動は、このような世界的な搾取の構造というものから目をそらしている、またFGCを行う女性たちがこうした搾取構造の最底辺におり、FGCのような慣習にしかみずからの生存を維持する術を持たないことを見

逃している、そしてこうしたキャンペーンをやっている欧米の女性たちが、先進国の搾取に加担しているということ自体も隠蔽していると批判するのです。

さらにポスト・コロニアリズムの立場からなされる批判として、こうした人権派というのは、「進んだ西欧」と「遅れたアフリカ」という図式をつくらうとしているというものもあります。そこでは、進んだ西欧の女性が、遅れたアフリカの女性に手を差し伸べるといった図式があります。

これも私は、かなり当たっているのではないかと思います。FGCというと、われわれと非常に異なった社会で行われている慣習のように思われますけれども、それが美容整形とどう違うのかと考えたときに、なかなか難しい問題があると思います。

1. 3 グローバル化とFGM

このような議論の流れの中で、特に1990年代から現在にかけて、もう一度FGCを個別の政治的な、あるいは経済的な文脈に置き戻してみようという試みがなされています。

簡単に言うと、FGCというものの自体は一つの現象ではなくて、実は、非常に多様な社会のなかで、多様なことが行われているわけです。一応形態上は3つの類型に分類されているわけなのですが、細かく見てみると非常に多様であるわけですし、そこで行われているFGCの意味づけというのも非常に多様であるわけです。

それが、あたかも一つのようなものとして見られているのは、アフリカには一様に家父長制があるからというよりも、むしろ、この廃絶キャンペーンをしている側の人たちが、そういうまなざしで見ているという部分も、あるような気がします。つまり、そうしたものを脱文脈化して、それでたたいていっているというところも、なきにしもあらずという気が、私はするわけです。

それを一つ一つの文脈に戻すというふうな研究が、近年行われています。例えば、アメリカのリン・トーマス (Lin Thomas) という女性の歴史学者は、植民地下のケニアにおけるメル (Meru) という民族の若い女性た

ちが、自己割礼をしていった運動を取り上げています。

それはどういったような運動かというと、当時イギリス政府は、植民地下ケニアで、FGCを徹底的に廃絶しようとしていました。そのなかで、メルの男性長老たちも、植民地政府と結託して、女性が管轄していたFGCの儀礼に介入して、それを廃絶しようとしたわけです。そのなかで一部の若い女性たちが、—その当時のケニアというのは、隣のギクユというところで非常に強烈な抵抗運動があったわけですが—、それと呼応するかたちで、男性長老たちの抑圧に対して、自分たちで森林に入って勝手にFGCを行うというようなことをしたのです。

トーマスは、この自己割礼運動には、植民地支配、あるいは男性長老による介入に対して、若い女性が抵抗したという意味合いが強かったと言っています。これはFGCを、歴史の変動と、当時の政治的なコンテキストに置き戻す研究の試みだということが言えると思います。

このような政治的な影響というのは、実は今日では、いっそう大きくなっています。現在NGO、国連、アメリカをはじめとする第一世界の力によって、それぞれのアフリカの国で、FGCを禁じる法律をつくらせようとする動きがあります。

西アフリカのマリにおけるNGOのFGC廃絶のセレモニーについて扱ったクローディ・ゴスリン (Claudie Gosselin) の研究は、このような政治的な動きとFGC廃絶の動きの関係を明らかにする興味深い例だと言えます。そこでは、マリのローカルNGOのリーダーたちが、地方の女性割礼師を呼んで、彼女たちにナイフを渡させて、それを廃棄するという活動をしています。それをゴスリンは観察しているわけです。

ゴスリンの研究したローカルNGOの活動は、欧米のNGOによってバックアップされていました。欧米のNGOは、当然セレモニーに参加した割礼師たちは、FGCの及ぼす健康被害であるとか、FGCが女性の人権侵害であるということを納得して、それでナイフを差し出したというふうに解釈をしていたのです。けれども、実際はそうではなくて、ローカルNGOをリードしている上層階級の女性たちには、—FGCは欧米のNGOに強く訴えるものであるわけですから—、欧米のNGOからお金を受け取り、そ

のお金を自分の下にいる人たちに分配することによって、パトロン・クライアント関係を強化するというふうなもくろみがありました。そのなかで、自分のナイフを差し出した割礼師の女性たちにも、別の事情があったのだとゴスリンは言います。マリがだんだんとイスラム化していくなかで、FGCが、かつて割礼師が身を置いていた伝統的な宗教的、儀礼的文脈からどんどんと外れる形で行われるようになってきており、自分たちの活動が経済的に見合わなくなってきた。ですから、一定のお金をもらうことによってFGCをやめるとするのは、彼女たちにとっても経済合理的な活動であったということを行っています。

つまり、こうした廃絶運動というのは、実際にさまざまな影響を及ぼしているわけですが、その意味づけというのは、アクターの立場によって多様であるということ、ゴスリンは言っているのです。

ということで、今日の前半が終わったわけですが、これから後半に入っていきたいと思います。

2 エチオピアにおけるFGM —二つの社会の調査から—

2.1 伝統・アイデンティティ・女性の抵抗

次に、私のフィールドからのお話をしたいと思います。

図2はエチオピアの地図です。エチオピアはこのように、中央部が高地になっていまして、セム系と呼ばれるアムハラ (Amhara) 人であるとか、あるいはティグライ (Tigray) 人が住んでいます。これらの人々は、古代からのキリスト教国家の形成で、中心的な役割を果たしてきました。

このアムハラ人が、まわりの諸民族を19世紀の末に征服して、現在のエチオピアができています。ですからエチオピアは、1970年代前半まで帝政であったわけですが、その帝国とは、国内に多くの植民地を抱えているようなものでした。帝政は1974年の革命で、社会主義を標榜する軍事政権に取って代わられたのですが、その政権も、国民国家を作るにあたり、国内に当時90もあるといわれた民族に、アムハラ人の文化に同化することを強いました。1991年にティグライ人を中心とする反政府勢力にこの政権

は倒され、新政権は現在、民族ごとの自治政策をとっています。



図2 エチオピアの州区分と今回の調査地

私は現在FGCに関して、二つの地域で調査をしています。これらの地域は、どちらも主流のセム系文化には属さない人たちの住む地域です。ひとつはホールというエチオピア西南部のクシ系農牧民、もう一つは、オロモ (Oromo) というエチオピアで最も多くの人口を持つクシ系民族のうち、首都アディスアベバ近くで農耕に従事している人々です。

エチオピアでは、非常に広くFGCが行われています。東半分のソマリ人が住んでいるところでは、陰部封鎖が行われています。中央部では、性器切除型の割礼が行われています。さらに西のほうに行きますと、民族がスーダン南部やケニア北部に分布するナイル系民族やスルマ系民族が多くなってきて、FGCが行われる頻度は落ちます。

現在エチオピア政府やNGOは、有害文化 (harmful culture) についての啓蒙活動を行っています。何が有害文化かということ、さまざまな伝統的身体加工 (下唇に輪をはめる、歯を削る、額に傷を入れるなど)、あるいは特定の食物禁忌、早期婚などですが、特にFGC廃絶運動は、NGOのあいだで非常に盛んになっているということです。

一方で2004年には、エチオピアの刑法が改正されて、女性にFGCを行ったものは3ヶ月以下の禁固刑、あるいは500ブル以下の罰金 (2008年12月現在1ブル=9円)、女性の陰部封鎖は、3年から5年の禁固刑とされるようになりました。

さて最初にお話しするのは、エチオピア西南部に居住しているホールという民族についてです。ホールは人口およそ3千人で、雨期に川が氾濫をして、それが引いたあとにモロコシなどの作物を植える氾濫原農耕と、ウシやヤギ・ヒツジの牧畜によって生活しています。ホールには4つの地域集団があり、それぞれの集団には首長がいます。また年齢階梯制という、歳ごとにさまざまな役割を割り当てる社会制度がありまして、その長老集団が権力を持っています。

ホールの社会では、男性と女性には、象徴的な意味合いが振り当てられています。例えば男性は右側、女性は左側に座るといったことが決まっています。また男性は活発なヤギにたとえられ、女性は従順なヒツジにたとえられます。面白いことは、ヤギは主体的で賢く、ヒツジは従順で愚

かだといわれるのですが、神に祝福されるのはヤギではなく、ヒツジなのです。神に祝福され、ヒツジは脂肪のたっぷり詰まった尻尾—これは脂臀といい、低地で飼われているヒツジの特徴ですが—を与えられたと言います。脂肪は、バターや雨と関連づけられ、肥沃さ、豊かさの象徴となるのです。ここには、豊かさを内部にもつ受動的な女性と、自身は不毛でありながらそれをコントロールする力を持つ男性という、ホール独特の構図が見えます。

さてホールでは、女性は男性に対して従属的な立場にいますが、実際には男性以上の仕事をしています。放牧もしますし、農耕も行います。さらに女性にとって一番大変だと思うのが、モロコシやトウモロコシを粉にひく活動です。サドル型の粉ひきうすで、1日に数時間もこれをひくわけです。私もやってみたことがあるのですけれども、これは、ものすごくしんどい活動です。

ホールでFGCが行われるのは、結婚のときです。ホールでは、FGCのことをgunme hidin（膝を縛る）と言います。gunme hidinは婚姻の儀礼の5日目に行われます。

婚姻というのは、ホールにとって何かというと、親族集団から別の親族集団に女性が移動するということです。女性をもらった側は、ウシやヤギ・ヒツジ、そのほかさまざま婚資を相手側に渡します。女性をもらう側、渡す側はそれぞれ、ai bita, ai gurgura、つまり「買う」「売る」という言葉を使います。ただし、われわれは現金でのやりとりを「買う」「売る」というふうに言うのですけれども、この地域では、現金が入ってきたのはこの数十年のことです。もともとai bita, ai gurguraという言葉は婚姻交換で用いられていたわけなので、それを「買う」「売る」というふうに訳してしまうと、必ずしも正確ではないかもしれません。

しかし、いずれにせよ未婚の女性は「脂肪を持つ」と言われます。これには「豊かさを持つ」あるいは「非常に貴重なものを持つ」という意味合いがあり、要するに結婚によって家畜などの財をもたらしてくれるということです。結婚前の女性の両親にとって、その女性は一つの資産として考えられる側面というのが、やはりあるわけです。

婚姻の5日目に、女性はFGCを受けるわけなのですけれども、そのときに女性は身体にバターを塗られます。これは多産性を象徴しています。バターを身体に塗ると、肌が水に濡れたような感じになります。ホールでは、雨というのは神と密接にかかわるものとされ、豊かさをもたらすものと考えられているわけです。われわれは、雨が降ると何かがかかりますけれども、ここに実際に来て見るとわかるのですが、日陰でも40度を越えるようなものすごい暑さですから、雨が降ると、やはり恵みという感じがします。何よりも雨は、豊かな農作物の収穫をもたらしますし、家畜がどれくらい増え、ミルクがどれくらいとれるかも、雨で牧草がどれくらい茂るかによって決まるのです。

FGCを行うのは、その技術を持つ女性の長老で、金銭的な報酬はありません。婚姻の5日目に、花嫁は自分の家の前室で細長い桶にまたがって、ナイフで外陰部を切除されます。そこに花婿側の親族集団と花嫁側の親族集団から、すでに結婚した女性たちが集まって来て、ずっとそれを見守るわけです。

ホールでは、すべて外性器はきれいに切らないといけないというふうに考えられていて、未切除の部分があるかどうかというのを、彼女たちはじっと見て、厳しくチェックをするわけです。切除されていない部分があると「ちゃんと切除するように」と言うそうです。私は男ですから、その現場を見ることはできません。ですからこれは、女性たちから聞いた話です。

その後、花嫁は白い布に包まれて花婿側の家に運ばれていきます。これ以降は、私も実際に自分の目で見ました。そこで呪薬を飲まされます。さらに花婿側の家で、特定の種類の木を燃やして、その煙で傷口をいぶして傷の回復を待ちます。そのときに足の膝を縛っていますので、gunme hidin (膝を縛る) というふうな言い方をするわけです。傷が癒えると、花婿と花嫁は新たな家をつくって、そこで床をとものにします。

私は、FGCの調査をしようと思って、ちょうどアンケート調査のように、沢山の女性に同じ質問をして、統計的分析をしてみようと考えたことがあります。ところがホールでは、こうしたことに男性が口をはさむというのはたいへんなタブーで、私は、2人か3人目ぐらいの女性に質問したとこ

ろで、「この性悪な白人が」と言われ、すっかり意気阻喪してしまいました。みんなその話をするとすごく緊張するわけです。それまでは和やかに話していても、その話になるとものすごく緊張して、家を出てから、中で「性悪な白人が」とつぶやいたのを聞いて、私はもうこれはだめだと思って、そういうやり方はやめにしました。それからは日常会話のなかで、さりげなく尋ねるといいうやり方をしましたので、システムチックな調査はできていません。

けれどもそれでも、いろいろなことがわかりました。例えばFGCをどう思うかと女性たちに尋ねると、たいてい「これは、われわれの伝統である」と言います。「よいものである」と言います。「FGCが完べきになされていないと、それはとても恥ずかしいものである」と言うわけです。彼女たちは、川に自分の身体を洗いに行ったりするわけですが、同年齢の集団で行った場合に、お互いの割礼のあとを見せっこすることがあるそうです。そのときに、そこがつるつるでないと、とても恥ずかしいことなのだと言います。

しかし、ホールのFGCは、麻酔なしに行われるために激痛に耐えなければなりません。また傷が癒着して、出産時に切開することもしばしばあるということです。

ホールの女性は、婚姻をしていないときはハラテ (harate) と呼ばれ、結婚とFGCをするとウータンテ (uutante) と呼ばれまして、出産するとサレ (sale) と呼ばれます。FGCは少女から成人への移行を印づけるものであるというのははっきりしていて、通過儀礼の側面というのがあります。

FGCにはさらに、死と再生のモチーフがあります。FGCの後に少女が包まれる白い布というのは、死者を埋葬するときのもので、花婿の家で飲む呪薬というのは、男性の場合は、新生児で生まれたときに飲まされるものであるわけです。男性の場合は、それを飲むことによって、生まれ落ちた家のクランへの帰属が決まるとされます。ですからこれら一連の儀礼は、女性はいったん死んで、その後には今度は結婚相手の男性のクランに帰属したということ、象徴しているように思われます。

女性がクランに帰属するというのは、どのような意味を持つのでしょうか

か。男性にとっては、それは婚資と交換に嫁いだ女性が自分の嫡子を生むということであるわけです。これは教科書どおりの家父長制であるわけですが、もしその男性が死んでも、別の男性がその女性と床をともにして、それで子どもを産ませたら、婚資を払っていた死んだ男性の子どもになるわけです。あるいは不倫の子どもであっても、そうであるわけです。

ホールの場合は、よぼよぼのおじいさんと、非常に若い女性が結婚することもあります。おじいさんは、もう男性としての機能がないのですが、その場合も若い男性をあてがって子どもを産ませるといことがしばしばあります。

子どもを持つということは、ホールの男性にとってはとても重要なことで、子どもがないことは、想像しがたいことのようにです。子どもを持たずに死んだ男性は、ちゃんとした埋葬してもらえません。私は結婚も遅かったし、子どももなかなかできなかつたのですけれども、その話をすると、それまでにこやかに談笑していたホールの人たちが、何か凍りついたようになるんですね。何かとても気の毒な人を見てしまったというような、そんな感じを受けるみたいです。

女性にとってクランに帰属するとは、特定の親族集団に入り、その保護を受けるということを意味しています。さらに、それ以降は、夫の年齢階梯に属することになって、儀礼上で重要な地位につく場合もありますし、自分が交換される立場から、自分の娘を交換する立場に移行するというような意味もあります。

そこでFGCは、どのように解釈されるかということですが、まず男性の側から見ると、女性の特定の親族集団への帰属を、その女性の身体に刻印するもの、というような意味づけがあります。それはしばしば、ウシの「耳きり」にたとえられます。つまり、ウシはクランごとに固有の「耳きり」を入れられるわけです。彼らは百数十頭のウシを管理していますので、ウシが混じってもわかるように、特定のかたちの「耳きり」を入れるのです。FGCもそのようなもので、いったんFGCを受けると、もうその女性は、FGCを受けて移行した家の帰属物というふうにみなされるのです。ですからときどき、少女が恋仲の男性と駆け落ちすることもあるわけですね。

れども、駆け落ち先でFGCを受けていたら、追っ手は少女を連れ帰るのをあきらめて、代わりにウシを根こそぎ持ち帰るといふようなこともあるそうです。あるいは、私が聞いた事例では、駆け落ち先で、自分でFGCを始めた少女もいるという話も聞きました。恋人の家でFGCをしたら、もう自分はその家に所属するので、親といえども連れ戻せない、ということですね。

さらにもう少し深い読みをすると、結婚とFGCの背後には、略奪と殺害というモチーフも見ることが出来ます。花婿は割礼の当日に、敵を殺した戦士の扮装をして、供犠する去勢牛を連れて花嫁の家に現れます。花婿が戦士であり、供犠されるウシと花嫁が、殺される敵を象徴しているように思われます。ホールでは、特定の民族は甘い血をもっており、その民族に属する敵を殺すと、殺した人には豊饒がもたらされる—ウシは増えてミルクを出し、作物は豊作になり、殺した当人は長生きをする—と言われます。男たちはそのような敵を殺すことを望むのですが、特定のクラン同士の結婚の場合も、同じ表現が用いられ、そのような花嫁を娶ることを望むのです。

つまりホールのFGCは、花嫁が花婿によって象徴的に略奪され、アイデンティティを変更される儀礼という解釈も、当然し得るわけです。そのときの男性の役割は、自分が交換する主体、略奪する主体というポジションに立って、豊かさを持つ女性を交換するというものです。女性は豊かさの实体、容器とみなされ、従属性が強調されるのです。

では女性の場合はどうかというところ、女性は自分をしばしばウシに例えます。ですから男性と同じように、FGCは自分の帰属を決定する刻印だと考えます。同様に、略奪と殺人のモチーフを当てはめることもありますが、これは男性の、特に長老たちの解釈とは、かなり異なっています。男性長老は、FGCを略奪と殺人の枠組みで解釈するときも、さまざまな儀礼を引用して意味を解釈するのですが、女性たちは、そのような象徴的な解釈から距離を置いているように見えます。例えば、花婿が殺人者の扮装をして現れることから、そのまま、あれは男どもが少女を殺しているのだよ、というふうなことを言ったりします。そして男性にとっては、それは豊かさ

の客体を手に入れることであり、望ましいこととして語られるのですが、女性はそれを、自分たちが「殺人」の対象となるために当然ですが、何かしら忌まわしいこととして語っているのです。

女性たちは、FGCをめぐるいろいろな葛藤があると思われます。当然、肉体的な苦痛に対する恐怖というのがあります。FGCの前に、彼女たちは極度の緊張状態になって、身体がぶるぶる震えると言います。けれども重要なことは、女性が苦しんでいるのは、FGCが引き起こす肉体的な苦痛だけではないということです。むしろそれが象徴しているような、さまざまな場面における自己決定権のなさということが、より深刻なジレンマをもたらしているように思われます。

例えば、婚姻をめぐる自己決定というものは女性にとって非常に困難であって、自分が結婚したい相手と結婚できないことは、しばしばあります。このような場合にどうするかというと、例えば、先ほども言いましたように、自分でFGCをして相手のところに押しかけるというふうなことをする人もいます。しかしより一般的なのは、結婚後も恋人と違い引きをすることです。結婚後に夫以外の男性と関係を持つことは、ホールでは非常に多いですし、仲のよい女性同士が、そうした違い引きの手伝いをするのもしょっちゅうあるということです。浮気をするわけで、それがばれると刃傷沙汰になりますけれども、このような「不倫」じたいは、不道德なことだとは思われていません。なぜなら女性にとってもっとも大事なことは、結婚し、FGCでその帰属を決定された後、その帰属した親族集団で子孫を残すということですから。「不倫」で、たとえ子供が生まれたとしても、女性の産む子供の帰属には何の影響も与えないのです。

ここで少し話題を転じて、女性の抵抗に関連して、憑依カルトの話をしておきたいと思います。最初に述べましたように、エチオピアというのは、高地人が征服してできた国で、ホールも、そうした高地人の支配下で生きてきました。そして彼らは高地人をシダーマ (Sidaama) と呼んで、非常に嫌悪するわけです。高地人は、ホールにとっては搾取的な連中で、やってくると必ず国家の権威を盾にして、やれヒツジをよこせとか、やれヤギをよこせとか言ったりする、非常にどん欲で、ずる賢いやつらであると言

われています。一方高地人の女性はホールの女性と違って、男から男へ移動するような、放埒な女性であると考えられています。

ホールはそれに対して、高地人とは極力かわらないようにしてきました。首長のもとで自分たちの伝統を守ろうとしたのです。それは家父長制的な社会制度を維持するということであり、男は戦士として、女はそのもとで庇護され、夫の子孫を産み育てるものとして、位置づけられたのです。けれども実際には、ホールで権力を握ったのは、高地人に任命され、国家とホールを仲介するチカ・シユム (chik'a shum) と呼ばれた現地人の長でした。彼らは衣服など高地人から得た財を人々に与えることで取り巻きを作り、彼らを火器で武装し、首長よりも強い権力を誇ったのです。ホールの男たちが、このような仲介者に示した態度は両義的でした。彼らのことを、「シダーマの毒を飲んだ者」といって嫌う一方で、彼らの誇示する財や力に、どうしようもなく惹きつけられたのです。

エチオピアは、1974年に社会主義政権になって帝政が廃止されてから、男性は国家組織に参加する機会が生まれてきました。多くの男たちが、それまで特定の仲介者以外には閉ざされていた「富の源泉」に、アプローチできるようになったのです。しかし、社会主義政権は、高地人文化に対する同化を求めましたので、ホールの男たちはそれを拒否し、一方では伝統的な家父長制を維持しつつ、国家とかわってきました。

他方で女性は、そうした国家組織にも一切参加が許されずに、ずっと伝統の領域にとどまるわけです。自分で何かをしようとするような女性は、「高地人のような」というレッテルを貼られました。

このような時代に爆発的に流行したのが、アヤナ (ayana) という精霊の憑依するカルトでした。これは1960年代に、ボラナ (Borana) という隣の民族からホールに入ってきたものでした。精霊が憑依するわけですが、憑依された人が霊媒になって、どんどんと自分のフォロワーを広げていく。それによって占いとか病氣治療を行って経済的な利得を得る。この憑依カルトが、ホールでとても盛んになってきたのです。

現在ホールの女性の6人に1人ぐらいは、この憑依カルトの精霊に憑依されていると思われます。この憑依カルトの特徴というのはどこにあるか

という、一方では憑依カルトのなかで女性の行き来が、親族集団を横断する形で自由に行われます。憑依カルトの集会があるからという理由で、女性は外に出ることができるのです。もしそのような理由がなければ、ホールでは女性が集落の外部に、畑仕事や水汲み以外の理由で出るとは、とても困難です。他方で、この憑依カルトでは、高地人であるとか、あるいは外国人の文化が、儀礼や憑依する精霊を通して表象されます。

憑依カルトの司祭の家に行くと、精霊が降りてくる依り代に、高地人がもたらした蒸留酒だとか、石けんだとか、あるいは着物であるとか、衣服、そういったようなものが捧げられているのがわかります。

夜中から午前2時、3時まで続く憑依の儀礼と一緒に参加してみると、さまざまな精霊が参加者たちに憑依するのを見ることが出来ます。ところが憑依する精霊の多くは、彼らが嫌っている高地人の精霊なわけです。そこで行われる儀礼は、エチオピアの高地人が行っているコーヒー・セレモニー — これはエチオピア高地人が、隣人や友人たちとコーヒーを飲む機会に行う日常的なセレモニーですが — を流用したもので、小さな缶詰の空き缶や木のカップを、高地人が用いている陶磁器のカップに見立てて、コーヒーを飲むのです。

このカルトの女性にとっての意味は何なのでしょう。女性は霊媒となることで、リネージとかクランを横断するカルトの一員になります。そして精霊憑依を通じて、例えば、夫にコントロールされていた世帯内の権力関係というのも逆転させたりするのです。

それならば、精霊が高地人や外国人の姿をとるといえるのは、何を意味するのでしょうか。それは、ホールの男性が表向きずっと抑圧してきた欲望とか空間のイメージを、男性に抑圧されてきた女性が、憑依カルトで流用して、解き放っているということではないかと思うのです。家父長的な「伝統」では抑圧されてきたイメージを用いて、彼女たちが新しい社会的なネットワークをつくっているという点が、私にはとても興味深く思われるのです。

FGCの話から、後半ちょっとはずれてしまったわけですがけれども、ホールにおけるFGCを考える場合に、FGCは制度的な部分から見ると、家父

長制支配と密接に関連している部分があると思われます。しかし女性たちは、それを自分たちのジェンダー・アイデンティティを構成する重要な一部だとみなしています。欧米あるいは日本のフェミニストたちは、FGMを一貫して家父長制支配を維持する装置だと考え、その廃絶を訴えますが、ホールの女性たちは、それを維持することを訴えるのです。ホールの女性が、家父長制社会の外でみずからのポジションを確立することは現実的に不可能であるということが、彼女たちにこのような立場をとらせるのではないかと思います。国家の周辺に疎外された集団の、さらに周辺に位置する女性たちは、FGC廃絶派なら「拷問」とも呼ぶ「文化・伝統」が、自分たちの最後のよりどころになっている、ということだと思います。けれども廃絶派が主張するように、彼女たちは男性に一方向的に従属している、というわけではありません。「伝統」とは別の象徴のシステムである憑依カルトを通して、彼女たちの抵抗のネットワークは構築されているのです。

2. 2 NGOとFGM廃絶運動

あとは時間がないので簡単にいきます。アディスアベバでは現在、さまざまなローカルNGOが、FGMの廃絶を行っています。

アディスアベバから10キロほど離れたところに、アカキ (Akaki) 郡という地域があります。ここでイセダ (ICEDA) というローカルNGOが、FGMの廃絶運動を行っています。住民のほとんどは、オロモという民族です。

アカキ郡はアディスアベバから近いにもかかわらず、交通の便が悪いわけです。道がほとんどないので、ランドクルーザーに乗って何時間もかけないと、村の中に入れないというようなところです。ICEDAによれば、この地域では早期婚が非常に多いそうです。男性の95パーセントは18歳以上で結婚するのですが、女性の82パーセントは17歳以下、ときには13歳、14歳で結婚したりするのです。

もう一つは略奪婚が多くて、隣の町から男がやって来て、女性を通学途中であるとか、あるいは水くみの途中に拉致をして、そのまま結婚させてしまうということが、現在も頻繁に行われているということでした。

ここで、ICEDAは学校建設をしていまして、日本大使館の協力で、いま8つのうち2校、学校がつくられています。ICEDAは学校建設と並行して、略奪婚や早期婚を逃れようとする若い女性たちのシェルターも作っています。また花卉栽培などで、女性の現金収入を増やすことを計画しています。

この地域で行われているFGCは切除型で、割礼師の女性が行っているそうです。こうしたNGOの介入によって、いくつかのコミュニティでは、FGCがだんだんと廃絶される方向で動いているのですが、ここで興味深いのは、そのうちで何人かの女性たちが、中心的な役割を担っているということでした。けれどもなぜ特定の女性たちが、廃絶運動を中心に担うようになったのかという事情は、私にはまだわかりません。

もう一つ興味深かったのは、ではこうしたNGOが来るまで、女性たちはFGCをどう思っていたかということ、何とも思っていなかったということなんです。彼女たちは、FGCによって健康被害が起こること、それまでは知らなかったということでした。つまり、NGOが説明をすることによって、初めてそういう被害があるのだということに気がついたと彼女たちは言うのです。

FGCが社会問題とみなされ、どういったようなかたちで廃絶されていくかということを考えるときに、こうした外部の影響というのは非常に大きいということがうかがえるように思います。

3 FGMをめぐる倫理的判断とは？

最後に、こうしたFGMに対してどのように考えるのかということを中心に述べたいと思います。私がここで言えることは、やはり、それが行われている社会の個別の文脈に置き直さないと、その是非というのは、判断できないということです。

でもこれは、最初に述べた文化相対主義ではありません。文化相対主義というのは、われわれと彼らの文化というのを切り離して、彼らの文化のなかに一つの象徴というのを見るわけですけれども、社会的な文脈に置き

直すということはそうではなく、われわれと彼らとのかかわりの中で、FGCのあり方を考えるということだと言いたいのです。そして私のような研究者の活動も、多かれ少なかれ、現地の人々に対して、何らかの影響をおよぼさざるを得ないのです。

例えばホールにおいて、FGCの廃絶運動を始めることは、現実的ではないように思います。ホールの女性たちが望んでいるものは、もっと別のものであるわけです。例えば、粉引きという日常の重労働を軽減する、動力粉引き機であったりするわけです。彼女たちはFGCよりも石臼での粉引きのほうが、ずっと身体的につらいのだと言います。また取引のネットワークを作り、それによって現金を稼ぐということを始めている女性たちもいます。このような活動が始まるまでは、女性たちは家畜を始めとする財を持つことは、できなかったのです。このような活動は、女性をとてエンパワーしているように見えます。残念なことに彼女たちの活動は、現在地方政府により、反政府活動の根城になる恐れがあるということで、禁じられてしまいました。けれども私は、友人を通してこの活動をこっそりと応援しています。

アカキ郡の場合は、まだ十分な調査ができていませんので、判断を差し控えざるを得ません。けれども私がICEDAと関係を持ち、ICEDAの公教育の普及活動に、日本大使館の草の根援助を仲介することで協力しているということ自体が、FGC廃絶の基盤を形成するのに一役買っているということになると思います。そして私たちは、そのようなことに、意識的である必要があると思います。

倫理的な判断というのは、やはり、一つ一つのケースによらないとできないだろうということが言えるのではないのでしょうか。もし研究者の活動も、当事者たちへの影響が避けがたいのだとするのなら、普遍的な倫理に訴えたり、文化の自律性や相対性を論ずる前に、まず現地の事情を十分に観察するということが、必須のことのように思います。最後のほうは手短にしか述べることが出来ませんでした。これで今日のお話を終わりたいと思います。

【参考文献】

- AAWORD. 1983 (1980), 'A Statement on Genital Mutilation', in M. Davies (ed.), *Third World-Second Sex : women's struggles and national liberation*, London : Zed Books.
- Ahmadu, F. 2000, 'Rites and Wrongs : An Insider/Outsider Reflects on Power and Excision', in B. Shell-Duncan and Y. Hernlund (eds.), *Female "Circumcision" in Africa : Culture, Controversy and Change*, Boulder : Lynne Rienner publishers.
- Boddy, J. 1982, 'Wombs as Oasis : The Symbolic Context of Pharaonic Circumcision in Rural Northern Sudan', *American Ethnologist* 9 : 682-698.
- 1989, *Wombs and Alien Spirits : Women, Men and the Zar Cult in Northern Sudan*, Madison : University of Wisconsin Press.
- El Dareer, A. 1982, *Woman, Why Do You Weep? Circumcision and its Consequences*, London : Zed Press.
- Gosselin, C. 2000, 'Handing over the Knife : Numu Women and the Campaign Against Excision in Mali', in B. Shell-Duncan and Y. Hernlund (eds.), *Female "Circumcision" in Africa : Culture, Controversy and Change*, Boulder : Lynne Rienner publishers.
- Gruenbaum, E. 2001, *The Female Circumcision Controversy : An Anthropological Perspective*, Philadelphia : University of Pennsylvania Press.
- Hicks, E. 1996, *Infibulation : Female Mutilation in Islamic Northeastern Africa*, New Brunswick : Transaction Publishers.
- Hosken, F. 1982, *The Hosken Report : Genital Mutilation of Females, Third Revised Edition*, Lexington, Massachusetts : Women's International Network News. = 1993 鳥居千代香訳『女子割礼－因習に呪縛される女性の性と人権』明石書店。
- 宮脇幸生 2004「国家と伝統のはざままで —エチオピア西南部クシ系農牧民ホールにおける女子「割礼」」『地域研究』6 (1) : 221-250。
- 2006『辺境の想像力 エチオピア国家支配に抗する少数民族ホール』世界思想社。
- 2007「グローバル化する世界における女子割礼／女性性器切除－交渉されるジェンダーとセクシュアリティ」中谷文美・宇田川妙子編『ジェンダー人類学を読む』世界思想社。
- Obermayer, C. 1999, 'Female Genital Surgeries : The Known, the Unknown, and the Unknowable', *Medical Anthropology Quarterly* 13 (1) : 79-106.

- 1999, 'The Health Consequences of Female Circumcision : Science, Advocacy, and Standards of Evidence', *Medical Anthropology Quarterly* 17 (3) : 394-412.
- 岡 真理 1998 「「同じ女」であるとは何を意味するのか —フェミニズムの脱構築に向けて」江原由美子編『性・暴力・ネーション』勁草書房。
- 大塚和夫 1998 「女子割礼および／または女性性器切除 (FGM) — 一人類学者の所感」江原由美子編『性・暴力・ネーション』勁草書房。
- Thomas, L. 1997 'Ngaitana (I will circumcise myself) : The Gender and Generational Politics of 1956 Ban on Clitoridectomy in Meru, Kenya', in N. Hunt, T. Liu and J. Quataert (eds.) *Gendered Colonialisms in African History*, Oxford : Blackwell Publishers. = 2003 富永智津子訳「ンガイタナ (自分で割礼するわ) —ケニア・メル県における1956年のクリトリス切除禁止をめぐるジェンダーおよび世代の政治学—」『共同研究 多民族社会における宗教と文化』7 : 87-104、宮城学院女子大学キリスト教文化研究所。